

経理 DX が全社の「次の当たり前」をつくる

## 請求書業務を刷新し、 「紙ゼロ・残業ゼロ」を実現

福島県を中心に、介護用品やリネン品のレンタル事業を展開する同仁社。

地域の生産年齢人口が減少する中、事業を継続していくためには、生産性の向上が不可欠だったという。

2025年11月に開催された「Sansan Innovation Summit 2025」では、  
全社的な DX の足がかりとして刷新に取り組んだ月1000件に及ぶ請求書の処理業務について講演が行われ、  
アナログが当たり前だった業務を変革した軌跡と、変化を浸透させるための工夫が語られた。



株式会社同仁社  
管理統括本部 財務部 システム課 課長

### 幾世橋 健次 氏

2009年、株式会社同仁社に入社。法人向けユニフォームレンタルの営業職を経て、基幹システム更改を機にシステム管理を担当。現在は財務部システム課課長として、内部統制や監査に携わりつつ、社内のあらゆる業務効率化を進めるべく、DX推進に取り組む。2023年のBill One導入プロジェクトではリーダーを務め、全社を巻き込む周回準備でスムーズな運用定着を実現。

## 月1000件の請求書を紙中心の業務プロセスで処理。 法対応も間近に控え、効率化が喫緊の課題だった

「清潔と健康」を使命とするトーカーグループの一員として、介護用品やリネン品のレンタル事業を展開する同仁社。アナログな業務プロセスが根付いている地域で同社がDXに着手するにあたり、幾世橋氏が重視したのは、すべての従業員に関わる業務から始めることだった。

「変化を経験し、便利さを体感すれば、他の取り組みに対する従業員の抵抗感をなくすことができます。だからこそ、『一人も漏れなく触れる業務』から変えることで、**全員にDXのメリットを肌で感じてもらう必要があると考えました**」。

そこで同社は、まずすべての従業員に関わる給与システムのデジタル化を実施。共通の体験が社内に浸透し、新しいツールに対する抵抗感を和らげることに成功した。

こうして社内でDXに対する期待が醸成されたタイミングを見計らい、幾世橋氏が次なるターゲットとして定めたのが、間接部門の中でも特にアナログな作業が多く残っていた請求書業務だった。

当時の請求書業務には、大きく二つの課題があった。一つは、**圧倒的な紙の量だ**。月間約1000件、年間1万2000件の大量の請求書を、すべて紙ベースで処理していたのである。

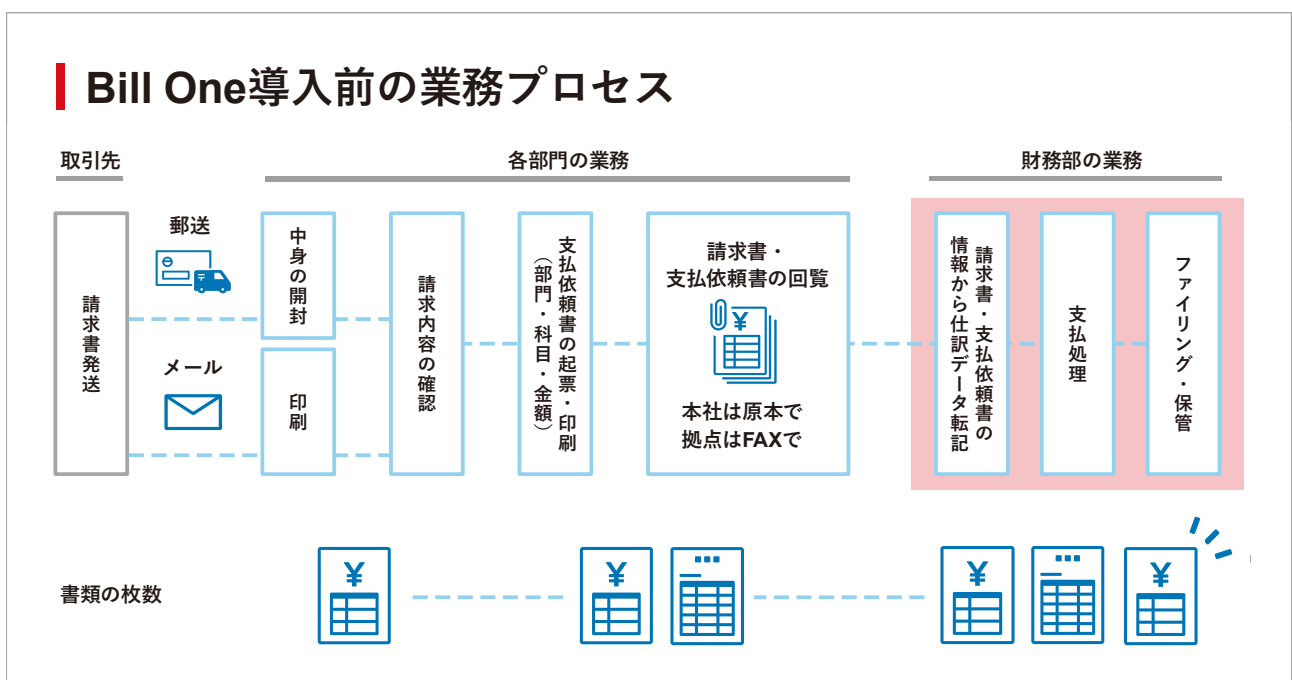
「とにかく『紙』が多かった。紙であるがゆえに、承認のために出社しなければならず、保管場所の確保にも困っていた」。

もう一つは、同社の業務プロセスが原因で発生していた無駄な作業だ（図1）。親会社の連結決算に間に合わせるために、同社では経理の締め日を早くに設定する必要があり、請求書を本社に集めてから処理していたが、拠点からの郵送では期限に間に合わない。そのため、FAXで取り寄せた請求書を経理が先行して処理していた。結果として、後日本社に到着した請求書の原本とFAXで取り寄せた請求書を照合し、差し替えて原本のみを保管するという煩雑な作業が発生。加えて、当時は現場担当者が作成した支払依頼書を経理担当者が参照し、同じ情報を会計システムへ転記するという、重複した作業を行っていた。これらの無駄な作業が、大きな負担となっていた。

電子帳簿保存法とインボイス制度への対応期限も迫る中、幾世橋氏はこれらのアナログな作業を一掃し、ペーパーレス化を実現するためにBill Oneの導入を決断した。

「業務量を増やさずに法制度に対応したかったんです。現場でも、請求書業務をペーパーレスにして効率化したいという声が上がっていて、この機会に解決すべきだと考えました」。

【図1】



## 取引先にも従業員にも負担をかけず、業務を変える。 誰もがパフォーマンスを発揮できる改革のポイント

月1000件に及ぶ請求書の処理業務を変えるプロジェクトともなれば、現場の混乱や取引先への案内に苦戦するケースも少なくないが、幾世橋氏は「当社に限っては、まったく苦労した記憶がない」と語る。その裏には、元営業職ならではの視点と、緻密に計算された導入プロセスの工夫があった。

一つ目のポイントは、徹底した「取引先ファースト」の視点だ。幾世橋氏は営業職時代、取引先から請求書の形式の変更を求められ、苦い経験をしたことがあるという。

「取引先から『来月からこの形式に変更して送付してほしい』と言われると、営業担当の立場としては断れません。しかし社内に持ち帰ると、経理担当者から『なぜそんな面倒なことを勝手に決めてきたのか』と怒られてしまいます。自社がシステムを導入する際に、取引先にも同じ思いをさせてしまうようでは、スムーズに協力を得られないだろうと考えました」。

だからこそ、Bill Oneの特長の一つである請求書の代理受領が決定打になった。取引先は送付先の住所をBill Oneに変更するだけで、従来通りの方法で請求書を送付することができる。取引先の業務は変えずに済ませるという配慮が、スムーズな移行を実現するための土台となった(図2)。

二つ目は、従業員に対する「事前の教育」だ。幾世橋氏は従業員に不安を感じさせないために、オンライン説明会や社内マニュアルの作成に加えて、ユニークなデモンストレーションを実施した。

「導入前の一か月間、私が作成したダミーの請求書を、毎日1通ずつ全ユーザーに送り続けました。実際に届いたメールからBill Oneを開いて、承認・仕訳入力するという一連の作業を繰り返し練習してもらいました」。

これによって、請求書業務に関わる従業員は導入前にBill Oneの操作を完全にマスターした。本番稼働時には問い合わせがほとんどなく、初月から順調なスタートを切ることができた。

そして三つ目が、「業務をシステムに合わせる」という考え方だ。か

つては「自社の業務フローに合わせてシステムをカスタマイズすることが多かった」というが、それではコストも時間もかさむ上に、システムの真価を発揮することができない。

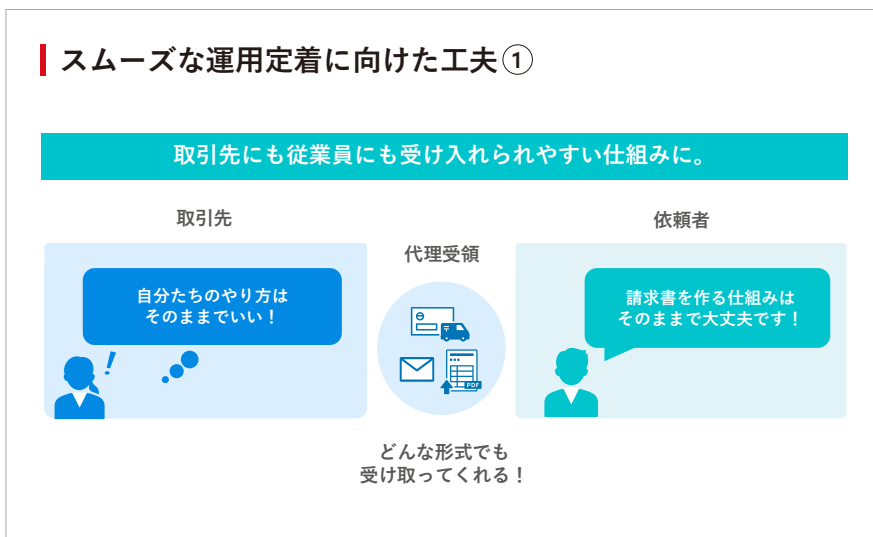
「Bill Oneのように専門の企業が開発したクラウドサービスは、多くの企業のベストプラクティスが詰まった『完成された仕組み』です。ゼロから自分たちで考えた仕組みに合わせてシステムをカスタマイズしようとする、結局は時間とコストがかさんでしまいます。それよりも、Bill Oneが推奨するフローに自社の業務を合わせたほうが高いパフォーマンスを引き出せる」と考え、既存のやり方を捨てる決断をしました」。

「取引先ファースト」「事前の教育」そして「業務をシステムに合わせる」という三つの工夫により、同社はスムーズにBill Oneを導入することができた。

請求書業務の改革は、取引先と社内関係者、双方の協力を得なければ実現できない。同社が取り入れた手法は、多くの企業が抱える課題の解決にも、共通して有効な工夫だと言えるだろう。さらに、社内のDXに対する意識もより前向きになったという。

「新たなDXプロジェクトが立ち上がる際にも『あ、Bill Oneみたいな感じね』とポジティブに受け入れられるようになりました。Bill Oneの導入が、全社の変革を加速させる呼び水になったと感じています」。

【図2】





## 請求書業務をデジタル化して一つのフローに集約。 紙の請求書と無駄な作業がすべてなくなった

Bill Oneの導入を振り返って、幾世橋氏は「デメリットと感  
じる部分が一切ない」と言い切る。その成果は、「業務効率  
化」という言葉では表現しきれないものだった。

第一に、紙の請求書に関する物理的な作業がすべてなくな  
った。各拠点から集めていた請求書のFAXが不要になり、  
FAXと原本の突き合わせ・差し替えや、膨大なファイリング作  
業も、Bill Oneによって過去のものとなった。

第二に、無駄な入力作業がなくなった。以前は現場の支  
払依頼書の情報を経理担当者が手入力していたが、今はBill  
Oneで承認済みのデータをCSVファイルとして出力し、会計  
システムへ連携するだけで作業が完了する。かつての請求書  
業務は、経理担当者2名が月初の数日間に残業をして対応し  
ていたが、現在は1名の担当者のみで残業せずに処理でき  
ているという。

さらに、波及効果も大きい。デジタルで請求書業務が完結  
し、場所を選ばずに対応できるようになったことで「上司が出

張中で承認印がもらえず、処理が止まる」といった現場の悩み  
は解消された。また、すべての請求書のステータスが可視化さ  
れ、「あの請求書は今どこにあるのか」といった問い合わせへ  
の対応や紛失リスクも低減されている。

今後の展望として、幾世橋氏は、業務自動化の拡大と財務  
部の役割の進化を掲げた。社内に残る手作業をRPAなどで一  
掃し、財務部を経営戦略の提言ができる組織へ変えていくこ  
とを構想しているという。

幾世橋氏の原動力となるのは、「仕事よりもプライベートを大  
切にしたい」という飾らない本音だ。「だからこそ、面倒な仕事  
はITに任せて、楽しんでいきたいんです」。そう笑う幾世橋氏  
の思いが詰まったプロジェクトは、同社への働き方を根本から変  
え、同社のDXを次のステージへと押し上げている。「間接部門  
で培った経理DXのノウハウを他の部門へも展開し、売り上げ向  
上に貢献できる攻めのDXにつなげ、全社の『次の当たり前』を  
つくっていきます」と語り、幾世橋氏は講演を締めくくった。

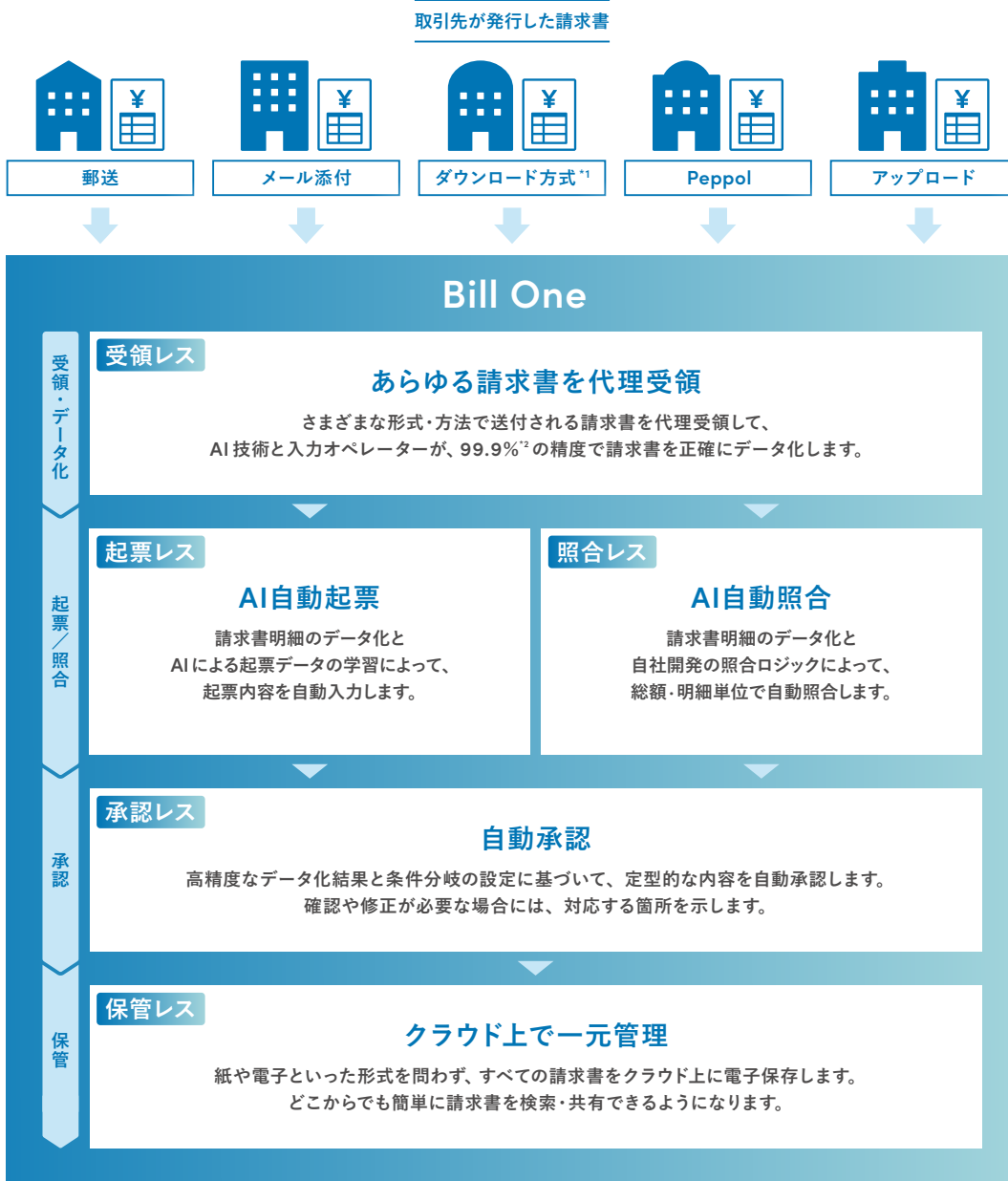
「なくせる」をつくり、全社の働き方を変える

# Bill One 請求書受領

あらゆる請求書を代理受領し、AI技術とテクノロジーで自動化を実現することで、

請求書業務のプロセスに「なくせる」をつくります。

経理部門だけでなく、全社の働き方を変えていく、これまでにないクラウド請求書受領サービスです。



\*1 請求書ダウンロードサイトの仕様や変更、メンテナンスなどにより受領できない場合があります

\*2 Sansan株式会社が規定する条件を満たした場合のデータ化精度

**Bill One**  
powered by Sansan

お問い合わせ | デモ依頼やお見積りについては、お気軽にお問い合わせください

bill-one@sansan.com

0800-100-9933

https://bill-one.com/ap/

Sansan株式会社 [本社] 〒150-6228 東京都渋谷区桜丘町1-1 渋谷サクラステージ28F

※ 本資料は2026年2月に作成されました。掲載されている内容は作成時点での情報です。

※ 本資料の記事・写真等の無断転載、複写、複製を禁じます。

© Sansan, Inc.